

今月の谷口雅春先生のお言葉

## 親の心の縛りをほどきましよう

子供の反抗は、親の心の縛りが原因である

子供の伸びる力は生命である、生命は神であるから、放っておいたら必ずよくなるのである。ニールは自由教育を説いた。自由教育とは解放の教育である。わたしも解放の教育を説くのである。生命は解放されたときスクスクと伸びる。わたしは親たちがその子供が上級学校へ入学しなければ親の体面上都合が悪いから、ぜひその子供に入学するように、そのために極度に勉強するように、親たちの精神波動でその子供を勉強にまで縛って

いる場合には、その親たちが言葉で子供を縛ることをやめて一見放任していることとした場合でも、その親たちの「精神的縛り」に対する子供の反抗はやまらないで、その反抗の無意識的表現として、勉強に対する嫌悪となり、退屈をもよおし、勉強室に坐っていることが実に憂鬱になり、勉強が実につまらない労苦となつて、知らず知らずその子供が勉強室を脱けだすようになる实例を知っている。親の心が、子供を勉強室に縛っている場合はその勉強室は親の精神波動で十重二十重に縛られているから、その室内に入るや否や、子供はなんとなく不快に、窮屈に、憂鬱に感じて、その室から飛び出したくなり、

外出すれば心の愉快を感じ、さらにカフェーその他へ誘惑されやすい機会をつくるのである。そういう場合、親がわたしの話を聴いて、なるほどと思い「子供は神の子だからそのまま勉強家だ」と思うようにし、心で勉強の牢獄ろうごくに縛りつけておくことをやめると間もなく、その子供が、勉強室にいることに愉快を感じ、勉強室に落ちついて熱心に勉強を始める実例は数多あまたあるのである。

〔『生命の實相』頭注版第25巻85～86頁〕

## 親の心の縛りは「迷い心」である

親の利己主義、親の名誉心、親の虚栄心きよえいしんによって、子供をこういう具合にしなければ世間体せけんていが悪いという親の「迷い心まよひこころ」の綱つなによって、その子供を縛しばってしまおうということとは、神の子たる「子供」を冒瀆ぼうとくすることになるのであります。「お前せひとも学校へ入学しなければならんぞ」こういうふうな「ねばならぬ」の心の綱で縛しば

てしまう。「心」というものは一つの波でありますから、親がそういう心持こころもちを持っておりますと、その精神波動が波及はきはみして、「心の綱こころづな」で相手を縛しばってしまおうのであります。子供を「心の綱」で縛しばってしまいますと、子供はなんとなしにその縛りに精神的窮屈ききつさを感じ、その縛りから解ほどかれないという気持が起こってくるのであります。親の「心の綱」の縛りから解ほどかれないという気持が子供に起こると、その子供の日常の操行そうこうが變わつてくる。乱暴らんぼうになったり、落ち着きがなくなったりするのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30巻36～37頁〕

## 「わが子は神の子である」と信じていることから

「自家うちかの子供は神の子だから必ず善くなるのである」ということを信じて、そのままに見ておいたら、今まで五年間ずっと操行そうこうが悪くて先生から父兄ふけいが招よばれては叱言こごとをいただいていたその子供の操行が甲こう（成績等が上位）

になってしまった。これはなぜであるかということを考えてみなければなりません。それは親の心が縛らなくなったからです。親の心の綱で縛られていると、その縛りを解くために、暴れたり、いろいろ悪戯したりするのですが、親が「わが子は神の子である」と信じて心で縛らなくなった時に、子供はどこにおつても自然と、のんびりしたような気持になって、それに反抗的に悪戯しなくなりましたのであります。そのように親が「心の綱」で縛るといふことは非常に恐ろしいものであります。

たいていの人は、「心の綱」などは肉眼では見えないのでありますから、「別段わたしは自分の家の子供を縛ったことはありません」などと言われるかもしれませんが、けれども、多くの親たちはたいいてい、子供を自分の「心の綱」でがんじがらめに縛りつけておるのであります。そのために反動として子供の品行が悪くなり操作が悪くなるというようになっているのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30卷38頁〕

### 子供の本当の相を信じて、心で拜む

人間には仮の相と本当の相とがあるのです。仮の相というのは(中略)親が心で縛っているとそれに反抗するために、あるいは操行がわるくなったり、成績が悪くなったりして、周囲の心の反影として出てくる、これが仮の相でありまして、本来その子の操行がわるいのも学業の成績が悪いのもないのであります。人間の本来の相、本当の相は神の子でありますから、「本来この子は善い」と、子供の実相、その本当の相を見て、それを拝み出すようにしますと——拜むといっても、あながち掌を合わさなくてもむろんよいのですけれども——心で子供を拜む——「うちの子供は本当に神の子であつて立派な子である。放つておいても大丈夫である。決して悪くなるようなことはないのである」と子供を信じて心で拜むのであります。〔『生命の實相』頭注版第30卷39〜40頁〕